

# 第1章 和歌山から来た少年

## 和歌山から商都・大阪へ

和歌山の生家は村でも上位に入る小地主で、かなりの資産家であったが、幸之助が4歳のとき、父が米相場で失敗、先祖伝来の土地を人手に渡し、単身大阪に働きに出た。その父から母のもとに、「幸之助も4年生で、もう少しで卒業だが(当時尋常小学校は4年制であった)、大阪八幡筋にある心やすい火鉢店で、小僧がほしいとのことである。ちょうどよい機会であるから幸之助をよこしてほしい」という手紙が届いた。

当時の南海鉄道(現・南海電鉄)紀ノ川駅から幸之助は、一人汽車に乗って大阪に向かった。1904(明治37)年11月23日、満10歳の誕生日を迎える4日前のことである。

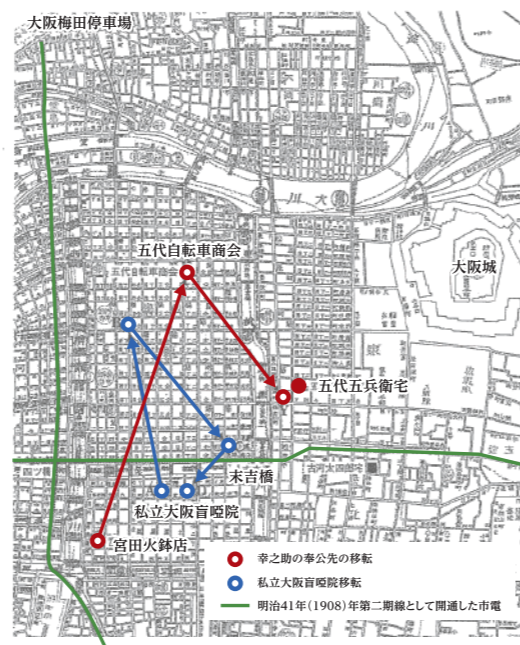
駅まで見送りに来た母は、心配と寂しさで胸が締めつけられる思いだったのであろう。「体に気をつけてな。先方のご主人にかわいがってもらうやで」と、目に涙を浮かべながら、こまごまと幸之助に言って聞かせた。

幸之助も、母と別れる寂しさと、初めて汽車に乗るうれしさ、商都といわれる大阪へのあこがれと、悲喜こもごもの言いようのない思いでいっぱいであった。この晩秋の紀ノ川駅での情景は、いつまでも幸之助のまぶたに焼きついて離れなかった。

晩年、幸之助は、「今静かに考えてみますと、9歳の子どもを、自分の膝元から遠く手放さなければならなかったことは、母としてこの上なくつらいことであつたにちがいないと思います。そして、おそらくそのときの母の思いは、大阪へ行ってからのぼくの幸せ、健康というものを、言葉では言い表せないくらい心に念じていてくれたように思います。ぼくが幸いにして健康に恵まれて長生きし、これまで仕事を進めてくることができたのも、やはりそうした母の切なる願い、思いの賜物であろうという気がしてならないのです」と述べている。

## 幸之助にとっての船場

船場での6年間を幸之助は、「今日の商売の一つの基礎になっていると思う」と語っている。また、往時の船場商人についても、「船場の盛んな時代は、大阪の商売人は江戸の人よりも、度胸があった。それは商売に対する真剣さからくるものだったと思う」と述べていた。幸之助はよく社員に「商売は真剣勝負」と諭していたが、その思いの背景には船場の商売人の姿勢に、大きな自負を持っていたからだといえよう。



## 船場の幸吉っとな

1904(明治37)年11月、火鉢屋の小僧として、幸之助の大阪での生活が始まった。船場の風習で、本名ではなく「幸吉っとな」と呼ばれるようになった。

最初の奉公先の宮田火鉢店は、八幡筋を御堂筋から西に入ったところであり、親方が何人かの職人を使って火鉢を作って売るといふ半職半商の商店であった。

幼い幸之助の仕事は、掃除や子守が主で、その合間に火鉢を磨くといった程度のものであった。仕事自体はさほど辛いものではなかったものの、母親と別れた寂しさに床の中で泣く日が何日も続いたという。

小僧としての給料は、毎月1日と15日に5銭ずつであった。現在の500円ほどに当たるであろうか、給料というより子供の小遣い程度のものだが、郷里ではそんなまとまった金をもらったことのない幸之助には、非常にうれしいものであった。それから80年もたった満90歳のころ、今まで一番うれしかったことは何かと人から問われて、この時の5銭の思い出を挙げているほどだから、よほど心に残ったのであろう。

この宮田火鉢店は、幸之助が入ってからわずか3カ月で店をたたんだため、幸之助は親方の知り合いの五代音吉のもとへ移ることになった。五代氏は、その頃流行りかけていた自転車店を始めるにあたって小僧を探していたところであり、また、その兄の五代五兵衛が創立した私立大阪盲啞院に幸之助の父が務めているという具合で、実に好都合な店であった。

五代自転車商会は、1905(明治38)年2月に堺筋淡路町二丁目で開業したが、2カ月後に内久宝寺町に移転している。



五代自転車商会にて。主人音吉夫人ふじと10歳の幸之助。これが人生初の写真。ある日、写真屋が店に来て全員で写真を撮ることになっていた。ところが、配達から帰ってくると、すでに撮影は終わっていた。しくしくと泣く幸之助に、ふじは2人だけで写真屋に行くことを提案し、撮られた1枚。